

豊後大野市内遺跡 発掘調査概要報告書 3

— 平成 22 年度調査 —

2012

豊後大野市教育委員会

例 言

- 1、本書は平成 22 年度に豊後大野市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて実施した市内遺跡の確認調査概要報告書である。
- 2、調査の体制は以下のとおりである。
調査指導 後藤宗俊（別府大学名誉教授）
小林昭彦（大分県教育庁文化課参事）後藤晃一（同 副主幹）
調査主体 久保田正治（豊後大野市教育委員会教育長）山口正美（同 教育次長）
調査担当 阿南鋼一（生涯学習課長）
高野弘之（生涯学習課文化財班長）諸岡 郁 肥高裕治 豊田徹士（同 文化財班）
このほか、小坂大塚古墳の調査において田中裕介氏（大分県埋蔵文化財センター主幹）よりご指導をいただいたほか、下記の方々よりご視察・ご助言をいただいた。（五十音順）
後藤幹彦氏（豊後大野市役所） 長直信氏（大分市教育委員会） 服部真和氏（熊本文化財総合研究所） 福田聡氏（佐伯市教育委員会） 森本星史氏（宇佐市教育委員会） 吉田和彦氏（杵築市教育委員会）
- 3、小坂大塚古墳の墳丘測量図作成については、玉川剛司氏（別府大学）をはじめ、別府大学考古学研究室生の協力をいただいた。また、墳丘についての考察について玉川氏には玉稿をいただいた。
- 4、発掘調査における実測・写真撮影は調査員で行い、調査基準点設置は埋蔵文化財サポートシステム大分市支店に委託した。
- 5、本書の執筆は調査担当が行い、編集は諸岡が行った。

目 次

I はじめに	1	IV 中野宮前遺跡	15
II 小坂大塚古墳	3	V 津留遺跡	17
III 岩上遺跡	14	VI 濱平塚原石棺群	19

I はじめに

1 調査に至る経過

大分県豊後大野市は、平成17年3月に大野郡7町村（三重町・清川村・緒方町・朝地町・大野町・千歳村・大剣町）が合併して成立した。その市域は広大で、大分県南部の大野川中流域のほぼ大部分に相当する。結果、豊後大野市内には先史から近代に至る様々な歴史・文化遺産を有することとなり、それは約500件の指定文化財や約700箇所の周知遺跡数にも表れている。これらの保護について合併前の各町村時代から引継いで取り組まれているが、特に市域の広域化と同時に各種開発工事も増加し、比例して埋蔵文化財調査の対応件数も増加している。

豊後大野市教育委員会は国庫補助を得て、これらの開発工事に対する遺跡の保存に向けた協議資料作成のため、事前の試掘・内容確認調査を実施している。平成22年度当初の調査予定遺跡は4箇所であったが、一部の開発予定が翌年度へ延期したものの、農業基盤整備や民間開発等が年度途中で発生し、事業計画を5箇所に変更して実施した。

遺跡範囲の確認調査として実施した小坂大塚古墳は、未調査の前方後円墳であることから遺構遺物の検出による資料把握を目指した。葺石や周溝などの遺構を確認することができ、重要な古墳の規模についての資料となるものである。しかし詳細な時期を特定できる遺物を確認する事はできなかったため、今後の課題である。

緊急開発に伴う確認調査として、農業基盤整備に伴う岩上遺跡・中野宮前遺跡、農業集落整備に伴う津留遺跡、農地深耕に伴う浪平石棺群において実施した。いずれも過去に遺構や遺物を検出されているものの、今回の調査では遺構・遺物が出土せず、遺跡の痕跡が認められないため、工事実施となった。

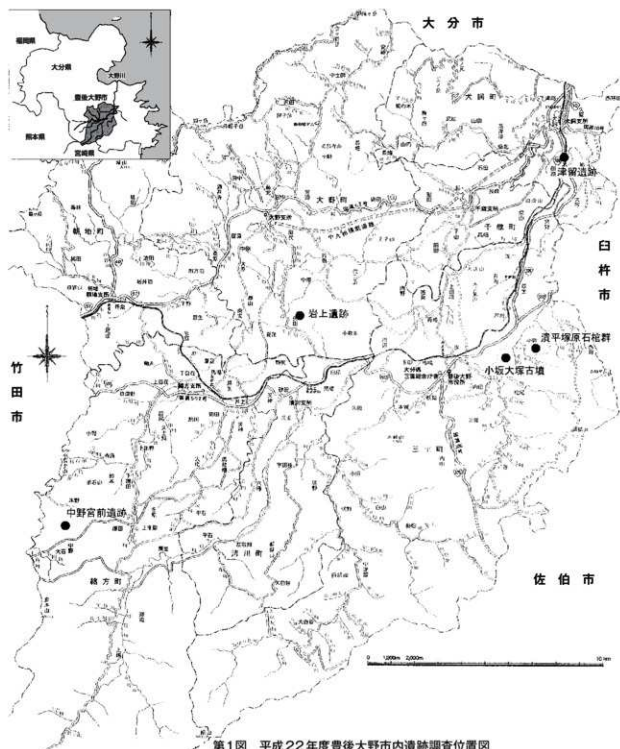
2 歴史的環境

大野川中流域には阿蘇溶結凝灰岩による台地や、大野川本流及び支流による沖積平野などの地形が随所に見られ、これらの地形上に数多くの遺跡が所在している。

旧石器時代の遺跡は国指定史跡の岩戸遺跡をはじめ、市ノ久保遺跡・津留遺跡・百枝遺跡・駒方遺跡群など著名な遺跡が多く知られている。縄文時代も同様で、早期の田村遺跡・鳥穴遺跡、前期の千人塚遺跡、後期の夏足原遺跡・惣田遺跡、晩期の大石遺跡・宮地前遺跡などで良好な遺構や遺物などが確認されている。

弥生時代では特に後期に大規模集落として多くの遺跡が各台地上でみられる。200基を超える堅穴住居跡や掘立柱建物群が検出された鹿道原遺跡をはじめ、高松遺跡・高添遺跡・二本木遺跡・陣箱遺跡など多数知られている。県下でも代表的な遺跡集中地域であるが、古墳時代以後になると集落遺跡は減少し、生活の痕跡は台地上から谷底平野への変化がみられる。しかし墳墓の遺跡は多く、8基の前方後円墳をはじめ、平井側流域周辺に円墳群、緒方川流域等に横穴墓群など数多くの墳墓遺跡の分布が知られている。

歴史時代以後について、市域は豊後国大野郡の大部分に含まれる。糸里跡と推定される地割が緒方平野で確認され、磨崖仏や石塔類などの石造物が膨大に所在する。遺跡調査例としては古代の遺跡は古市遺跡等で行われているのみで調査例は多くはないが、中世になると建物遺構が惣田遺跡や高添遺跡で、墳墓群が千人塚遺跡で検出されている。また、松尾城や高尾城など山城をはじめ、上門出遺跡や一万田氏館跡など多くの中世城館跡が確認されている。近世は白杵藩と岡藩の領域に属し、両藩の様々な関連施設や、街道や河川港などの交通の遺跡等が所在し、一部は現在でも人々の生活や社会と結びついている。



遺跡名	調査地	調査期間	調査原因
小坂大塚古墳	三重町小坂字大塚 3414 番地	12.4 ~ 2.27	範囲確認調査
岩上遺跡	大野町矢田字尾迫 1459 番地ほか	10.26 ~ 10.27	特用作物振興対策事業 (天地返し)
中野宮前遺跡	緒方町中野字宮前 242 番地	10.28 ~ 10.29	特用作物振興対策事業 (天地返し)
津留遺跡	大剣町田原字津留	12.4 ~ 12.4	中山間地域総合整備事業 (農業集落整備)
濃平塚原石棺群	三重町小坂字濃平 2183 番地ほか	1.20 ~ 1.25	整備事業

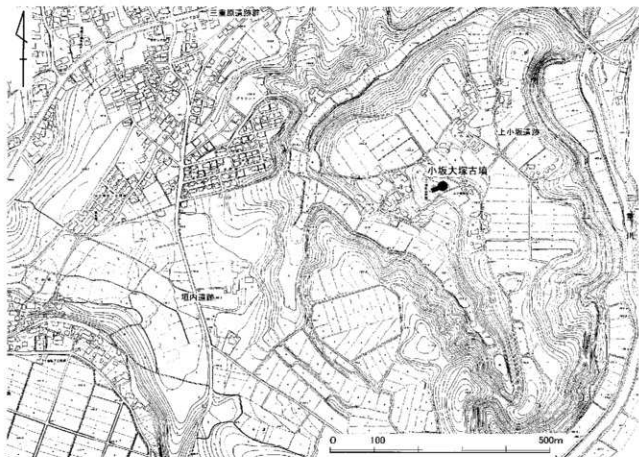
II 小坂大塚古墳

1 調査に至る経過

小坂大塚古墳は大野川の支流である三重川流域の前方後円墳群の一つで、最も下流側の東端に所在する。狭い谷底平野に囲まれた独立状の台地上で、周辺の台地を見渡せる標高約160mの一際高い場所に立地している。市内の他の前方後円墳が沖積平野を見渡す位置であるのに対し、唯一立地環境が異なっている。

存在は古くから知られており、大正13年には前方後円墳として報告され、昭和47年には「大塚古墳」という名称で大分県指定史跡となっている。近年には墳丘測量が行われるなど、大分県教委をはじめとした調査が行われるようになり、三重地域の古墳群全体からの位置付けについて考察や研究が進みつつある。これまでの調査で、全長約43mを計り、後円部に比べ前方部が小規模な柄鏡形の前方後円墳であることが知られている。全体的に保存は良好であるが、前方部北西端が崖によって失われ、後円部東から前方部南側の墳端付近は造成された地形であり、若干の削平を受けているものとみられる。後円部墳頂に庚申塔などの近世石造物群が造立され、一部に窺みがあるが、主体部や出土遺物については何も伝えられてはいない。葺石とみられる川原石が観察されているものの、段築等の施設は確認されていない。築造時期の推定できる資料は未確認であるが、これまで古式を示唆する墳丘形態から、古墳時代前期後半頃の築造時期が推定されている。なお、後円部東側に接するように径6m程の塚があり、従来は小円墳または造出などの古墳に伴う遺構とされていたが、近年は後世の塚とみられ、その実態は明確でなかった。

近年、上小坂区公民館改築に伴い、古墳に隣接する土砂の掘削が行われている。掘削断面からは遺構はみられなかったが、今後の開発における保存及び将来の国指定へ向けた基礎資料として、遺跡の内容及び範囲確認の調査を行った。



第2図 小坂大塚古墳位置図

2 調査に至る経過

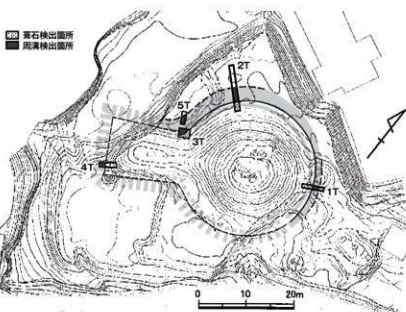
調査は周囲の伐採作業及び墳丘測量と併せて、調査トレンチを墳端の確認のため後円部に2箇所（1・2トレンチ）、北側くびれ部に1箇所（3トレンチ）、前方部端に1箇所（4トレンチ）、周溝の確認のため3トレンチ外側に1箇所（5トレンチ）の合計5箇所を設定し、人力で掘り下げた。

1 トレンチ

後円部東側の墳端および後円部東側に接する塚の確認を目的として設定し、幅1m長さ4.5mの範囲を掘り下げたところ、葺石及び周溝を検出した。

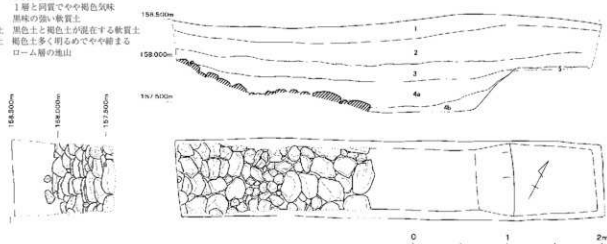
葺石は地表の墳端位置より1m強外側まであり、ほぼ隙間なく敷詰められた状態で検出している。葺石面は墳丘側より約28度傾斜し、標高157.6m付近で幅0.6mのテラス状平坦面があり、続いて幅0.7mの緩傾斜面で墳端となる。石材はやや角のある河原石と思われるもので、拳程度から人頭以上の礫が使用されているが、大きめのものは斜面に、小さめのものは平坦面という傾向があり、使用場所による石材の大きさの違いが観察できる。根石は最大長40cmを超え、全体的に他のトレンチより大型の礫が使用されている。葺石の外側には周溝の掘り込みを検出し、周溝底面の標高は約157.4m、根石より幅1.5mのほぼ平坦である。外側斜面は高さ0.5m約50度の傾斜で地山のローム層を掘り込まれている。出土遺物は見られない。

なお、後円部東側に接する塚について、トレンチに塚の南端が含まれているが、塚に関係する遺構は確認できなかった。トレンチ北壁の土層でも周溝に土砂が堆積した後に上層の黒色土による盛土の状況を示していることから、後世の築造と判断される。



第3図 小坂大塚古墳とトレンチ配置図（第8図に加筆）

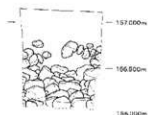
- 1層 黒色土 砂質の表土
- 2層 黒色土 1層と同質でやや褐色気味
- 3層 黒色土 黒味の強い軟質土
- 4層a 暗褐色土 黒色土と褐色土が混在する軟質土
- 4層b 暗褐色土 褐色土多く明るめでやや締まる
- 5層 褐色土 ローム層の地山



第4図 小坂大塚古墳1トレンチ実測図

2トレンチ

後円部北側の墳端及び周溝の確認のため設定し、幅1m長さ9.8mの範囲で掘下げ、葺石及び周溝を検出した。



葺石は1トレンチと比べて残り

も良くないためか隙間が多く、葺石の表面も揃っていないものの、テラス状平坦面と思われる状態が確認できる。礫も人頭大程の川原石が多く使われているが、1トレンチのような斜面と平坦面の石材に大きさの違いは観察できない。葺石面は墳丘側より30度傾斜し、標高約156.4m付近で幅0.6mのテラス状平坦面があり、幅0.8mの緩斜面に続く1トレンチと同様の規模・形態の墳端であると考えられる。根石も明確ではないが、地表の墳端より1.5m程外側に広がるものと考えられる。

周溝について、葺石より底面の幅は2.1m、標高約156mのほぼ平坦で、高さ0.5m、28度の傾斜で地山を掘り込まれている。1トレンチより幅は広く、標高はやや下がるが、地表からの深さは同じである。その外周は特に遺構はみられず、周堤などの痕跡はみられない。遺物も時期不明土器の小破片がわずかに出土した。

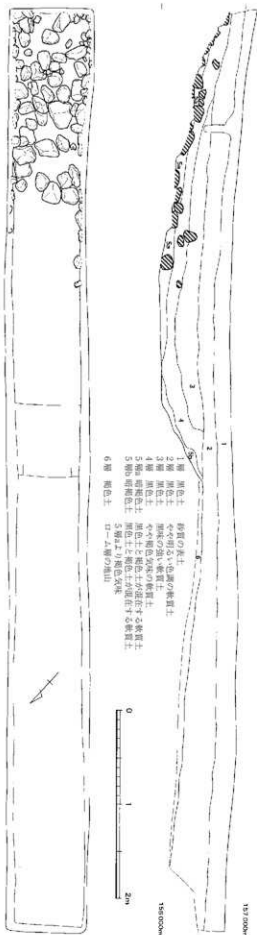
3トレンチ

3トレンチはくびれ部墳端の確認のため当初は2m×2mの範囲で設定した。葺石を検出したものの2トレンチと同様に良好な遺存とはいえないため、東側（後円部墳丘側）に拡張して最終的に2m×2.3mで掘り下げた。

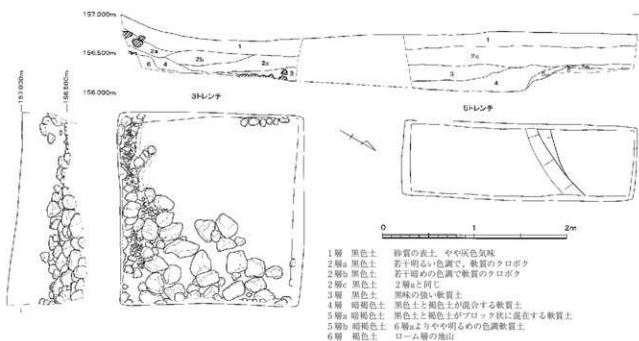
葺石は人頭大の川原石が後円部側で見られるものの、多くは元位置を保ってはいないためか、前方部から後円部へと続く根石ラインは不明瞭で表面も揃っていない。前方部側は特に攪乱を受けており、上層より多量の葺石が出土しているものの、根石と思われるような明確な検出できず、失われていると思われる。1・2トレンチで見られたテラス状平坦面は明確でなかったが、前方部側で径5cm程度の玉砂利状の円礫が標高156.5m程で平坦に置かれているのを検出している。この礫については前方部テラス等との関連がうかがわれるが、後円部側の葺石と一部混在しており、詳細については明確でない。出土遺物は時期不明土器の小破片がわずかに出土したのみである。

5トレンチ

1・2トレンチで確認できた周溝の外側斜面を把握するため、3トレンチの北側に幅1m長さ2.5mを追加して5トレンチとして掘り下げた。周溝の底面は標高156m程で外側に向かって若干下降気味に傾斜し、くびれ部より4m程の幅で外縁斜面を検出した。高さは0.3mで、35度の傾斜で地山を掘り込まれている。緩やかに



第5図 小坂大塚古墳2トレンチ実測図

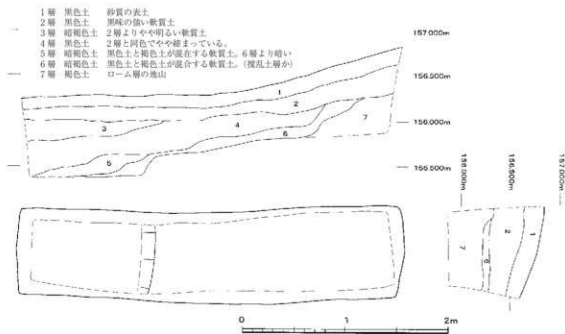


第6図 小坂大塚古墳3・5トレンチ実測図

カーブを描いている平面観であったため、周溝の平面形態は墳形に沿うように廻っていたものと考えられる。出土遺物は見られなかった。

4トレンチ

前方形西側に墳端の確認のため設定し、1m × 3m で設定したが、葺石遺構は検出できなかったため、3.8m まで拡張した。表土中に礫が混入していたが、葺石としての出土状態ではなく、一度攪乱を受けた形跡があった。また、墳端付近より外側に掘り込みを検出し、底部の標高は約 155.4m である。攪乱土層であるため前方形墳端を示すものかは不明である。出土遺物は近代の陶磁器や瓦片など近年の攪乱を示すもののみで、古墳に伴う遺物は見られない。



第7図 小坂大塚古墳4トレンチ実測図

3 まとめ

1 トレンチで検出したテラス状平坦面について、1段目の段築、あるいは立野古墳のような後円部に設けられた張出しテラスと思われる。2 トレンチでも同じように検出した状況から少なくとも後円部を巡っているものと考えられ、さらに3 トレンチの玉砂利の検出面も連続するものであれば前方部にも設けられていた可能性がある。それぞれ平坦面の標高について、1 トレンチが2・3 トレンチより1m 程高いのは本来の立地地形の影響と思われる。2・3 トレンチの残存状況が不明確であるうえ、礫の種類に相違があることから可能性に留めたい。

周溝について、葺石から掘込み上線までの距離は、1 トレンチでは15m、2 トレンチは29m、3・5 トレンチは4m で、周溝の幅は均一ではないことがわかり、平面形態は墳形に沿う形態に掘込まれている。断面は逆台形で底面の標高も1 トレンチが2・3 トレンチよりやや高いのはやはり立地地形によると思われる。墳丘規模について、トレンチで確認した葺石の範囲を墳丘とした場合、測量調査で確認できる地表上の墳端より1.5-2m 拡大することが推定される。4 トレンチの状況から墳端としては捉えられなかったが、墳丘の全長は44m、周溝を含めると48m 程度の規模と考えられ、これまで知られていた全長より若干上回る。墳丘南側には調査は行っていないため、各トレンチで見つかった葺石端と周溝端を結ぶように後円部を真円として復元した場合、後円部径は29m にも達する可能性があり、今後の墳丘南側の調査に期したい。

前方部側のトレンチでは墳端を検出できなかったため、前方部形態については今回の調査では断定はできないが、現況の平面形態は本来の墳形でない可能性がある。それは、4 トレンチでみられた削平は前方部西端全体に及ぶとみられ、さらに3 トレンチでの状況や過去の調査の記述から南北両側の墳端も削平を受けているためであるが、前方後円墳の形に沿って掘り込まれた周溝の外ラインから、現況の墳形とは大きな違いではないとも考えられる。前端部幅については現等高線からの推測でくびれ部よりわずかに開く13m 程度の、これまでの所見どおり細く小さい前方部であることには変わりないと考えられる。

出土遺物が乏しく、築造時期については手がかりを得られなかったが、墳丘形態は4世紀代の前期古墳の範疇と考えられることが妥当と思われる。しかし、このような段築構造や周溝形態をはじめ、今後の調査の進展が必要と思われる。

参考文献

- 本荘昇 前田多三郎 1924 「三重郷の史蹟」 『史蹟名勝天然記念物調査報告 第三輯』 大分県史蹟名勝天然記念物調査会
王永光洋 1987 「古墳時代」 『三重町誌総集編』 三重町
田中裕介 1995 「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画題(上)」 『おおい考古7』 大分県考古学会
田中裕介編 1998 「大分県文化財調査報告書第100輯 大分の前方後円墳 三重・西国東地区編」 大分県教育委員会
田中裕介 2009 「豊後大野市三重地域お首長墓とその動向」 『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』



小坂大塚古墳調査近景



小坂大塚古墳1トレンチ



小坂大塚古墳 1 トレンチ



小坂大塚古墳 2 トレンチ



小坂大塚古墳 5・3 トレンチ



小坂大塚古墳 3 トレンチ



小坂大塚古墳 4 トレンチ

小坂大塚古墳測量調査について

別府大学 玉川剛司

小坂大塚古墳の測量図については、平成9年(1997)に大分県教育委員会が中心となり測量調査が行われ、25cm間隔の等高線で精緻な測量図が作製されている(田中1998)。しかし今回、世界測地系による座標を用いた墳丘規模確認の発掘調査を実施する必要ができたため、あらためて座標管理のもと測量調査を実施することとなった。

そこで、デジタル機器を用いた変化点測量法により、小熊山古墳など県内多数の前方後円墳の測量調査を実施している(玉川2003, 2004)別府大学文化財研究所に、測量調査が依頼されるという経緯となった。

墳丘測量調査は、別府大学職員・玉川剛司の指導のもと、同大学の学部である生田中睦、馬場晶平、権丈和徳、崎谷雄紀が参加し、平成22年11月28日から23年2月27日の計15日間で行った。測量範囲は、墳丘部を中心に4843㎡で、計測点は墳丘部で約3,600点、周辺地形を合わせると計5,702点であった。測量調査にあたっては、あらかじめ市教委が準備した計7本の基準点をもとに、必要に応じて補助杭を設定し測量を行った。

以下、調査の成果について述べていきたい。

墳丘測量の内容と成果(第8図)

後円部

後円部北側については、墳端の傾斜変換線が良好に遺存している。この北側の傾斜変換線より、径27.4mのラインが後円部径であろう。

後円部の墳丘主軸から東側の墳端については、宅地による削平を受けており、墳丘本来の墳端ラインは確認できない。また、後円部南側のくびれ部に面するテラス面では、墳端の傾斜変換線が正円形に広がらず3.6mほど墳丘側に入り込み、くびれ部の傾斜変換線に接合している。この平面形態は、墳丘当初からのものか、削平によるものかは不明である。しかし、現状での墳端と考えられる傾斜変換線の標高を比較すると、南側の方が全体的に1.0m程高いことが確認できるため、築造当初から標高差があったものと考えられる。

段茶については、現状で確認できなかったが、墳丘斜面の東側から南側にかけて、葺石が良好な状態で残っているのが確認できた。墳頂部については、墳頂の標高が161.50mで、近世の庚申塔などが遺立されている。また墳頂部北側は、風倒木により等高線が乱れている。

くびれ部

墳端ラインの遺存状況が良好な北側の傾斜変換線から、墳丘主軸に直行する約8.6mがくびれ幅であると考えられる。また、くびれ部の墳頂標高は158.40mであった。

墳丘北側と南側くびれ部の墳端の標高をみると、北側は156.80m、南側では157.80mで、後円部と同様に1.0mの高低差がある。また現状では、墳丘主軸に対し南側のくびれ部の位置が、北側よりも2.2mほど後円部側で確認できる。この南側と北側の傾斜変換線を結ぶ幅は約9.0mである。

前方部

前方部南側は、くびれ部の手前6.0m付近から隅角にかけて宅地による削平を受けており、墳端が本来の形状を保っていない。前方部北側については、墳端の遺存状況が良好で、墳端の傾斜変換線がくびれ部から北西側の削平ラインに向けて若干外側に広がっている。これらの状況をふまえると、前方部幅は9.5mであると推測できる。前方部高については、くびれ側と削平されている西側とは、ほとんど高低差がなく、それぞれ158.40mと158.50mであった。また、前方部の長さについては、削平により正確な規模は不明であるが、

第1図より15.5mであると考えられる。

周辺部

墳丘北側の平坦面には、前方部から後円部北西側にかけて幅2.6m、深さ16cmの窪みがある。この窪みは、墳端の傾斜変換線に沿ってみられるため、周溝の可能性が高い。

また、後円部東側には、墳端に接するように、径約6.0m、高さ約1.0mの小円丘がみられる。この小円丘は、田中氏が指摘するように、古墳に付随するも施設ではなく、後世に造られた塚のようなものであると考えられる(田中1998)。

成果のまとめ

測量調査の結果から、小坂大塚古墳の規模は、墳長42.5m、後円部径27.5m、前方部長15.5m、くびれ幅8.6m、前方幅9.5m、後円部高4.35m、前方部高1.8mであったが、墳長及び前方部長については、今後の発掘調査により外側に延びる可能性がある。墳丘の形状については、墳丘北西側でくびれ部から前方部の削平ラインにかけて、前方部があまり広がらないことや、くびれ部の高さと同様に削平ラインまでの高さがほぼ同じであることから、橋本氏が指摘(1998橋本)するように、柄鏡形を呈する前方後円墳であると考えられる。

墳端および墳丘斜面の遺存状況については、墳丘主軸の北側は良好である。一方南側については、後円部の平面形態が正円形であると仮定すると、後円部が墳丘側に入り込みくびれ部の傾斜変換線に接合している。この状況から、南側のテラス面は、削平を受け墳丘盛土が崩れた可能性がある。これは、南側の墳丘斜面において、等高線160.00m付近から下端までの等高線間隔が、北側に比べ狭いことからもうかがえる。今後、保存・整備を考慮に入れた発掘調査による検討が必要であろう。

また、表採遺物については確認できなかった。

考察

以上測量調査の成果から、小坂大塚古墳は、その規模と墳丘形態から大野川上流域の七ツ森古墳群B・C号墳との類似性が指摘できる(表1)。両古墳の墳丘規模を比較すると、小坂大塚古墳はB・C号墳とほぼ同規模であることがわかる(第9図)。また、小坂大塚古墳でもみられたように、B・C号墳においても、墳丘主軸に対し北側と南側における墳端に標高差がみられる。これらの標高差の要因としては、自然地形に起因するものと、古墳築造における視覚効果を考慮したものとの両側面があると考えられる。前方後円墳という形を視認させるためには、前方後円墳という墳形であると認識が可能なある一定方向よりみせる必要がある。また、見せる側の平坦面が低ければ低いほど、視覚効果により、墳形そのものを実際より大きく見せることができる。このような条件をふまえると、小坂大塚古墳では、緩やかな谷地形となっている北西側に見たい対象が存在した可能性が高い。

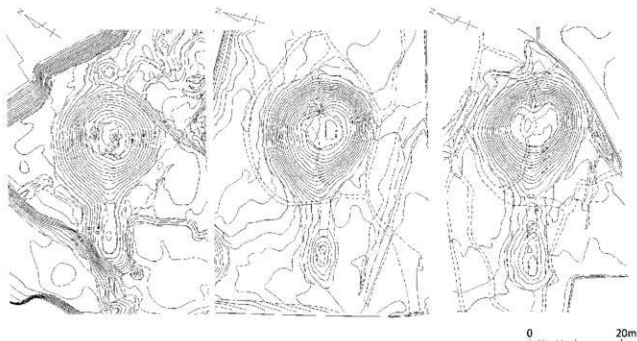
これらの墳丘形態や立地状況の類似性には、古墳築造における立地状況を決定する「占地」という概念が

	小坂大塚古墳	七ツ森古墳群B号墳	七ツ森古墳群C号墳
墳長	42.5m	48.0m	49.0m
後円部径	27.4m	28.9m	29.6m
前方部長	15.5m (17.0m)	19.7m (21.7)	20.0m
くびれ幅	8.6m (9.0m)	8.8m (9.4m)	7.0m
前方部幅	9.5m	8.5m	10.4m
後円部高	4.35m (3.25m)	5.5m (4.0m)	4.0m (3.75m)
前方部高	1.8m (0.5m)	1.25m (1.0m)	1.0m (0.75m)
墳丘主軸に対する標高差	1.0m	0.8m	0.5m



第8回 小坂大塚古墳測量図(S=1/400)

■ 墳丘部



第9図 小坂大塚古墳(左)と七ツ森B・C号墳(中央・右)(S=1/800)

表1 墳丘規模比較一覧(註2)

存在すると考えられる。この「占地」の概念とは、古墳築造にあたり立地条件を決定する概念で、良好な自然地形を選定する側面のみならず、当時の政治的な情勢をも包有する地域のランドマーク的な性格をもつものである(註1)。今後、大野川中流域と上流域の集落及び古墳との関係性をふまえて研究することにより、当時の奥豊後の社会構造が見えてくるものと思われる。

註1) 古墳の中には、生活・生産空間とかけ離れたところに築造され、その地域の拠点としてのランドマーク的な要素を持つ古墳が存在する。この小坂大塚古墳もその一つであると考えられる。

註2) 表中のくびれ幅の()は、北側と南側のくびれ部どうしを結んで計測した数値で、墳丘主軸に対し斜めに計測した数値となる。また、前方部長の()は、同様に主軸に対し斜めに計測した地点からの数値である。各後円部高、前方部高については、墳端が墳丘主軸に対し北側と南側で高低差があるため、南側墳端から計測した数値を()に表記している。

【参考文献】

- 諸岡 郁 1990 「三重町の前方後円墳」『おいた考古』第3集 大分県考古学会
 田中裕介 1998 「大分県の大形古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
 橋本幸治 1998 「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財報告書 第100輯 大分県教育委員会
 下村 智・吉田和彦・玉川剛司
 2003 「古墳におけるデジタル測量の研究 - 大分県下の古墳を事例として - デジタル測量」
 『九州考古学第78号』九州考古学会
 玉川剛司 2004 「小熊山古墳測量調査」『文化財研究所年報』2 別府大学文化財研究所

III 岩上遺跡

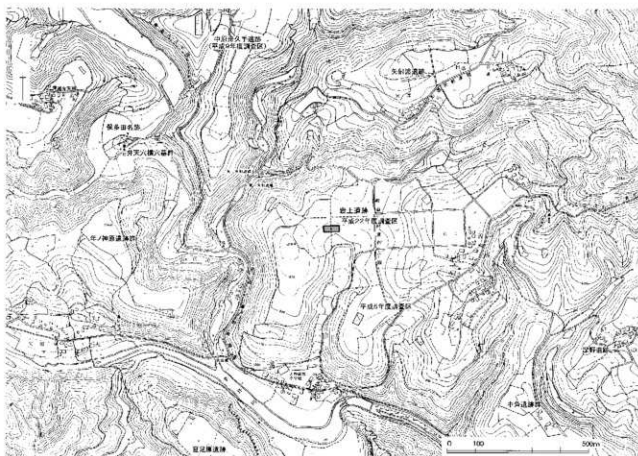
調査の概要

大野町南部の平井川を見下ろす台地上に所在する。平成5年度の試掘調査では特に遺構遺物は未検出であるが、以前から弥生時代文中期の下城式土器の出土が伝えられている。今回の調査区は台地最高所より西側に張り出した地形上で、過去の圃場整備の際に谷地形へと続く斜面を均して平地化した畑地となっている。従って、調査区の北寄りには削平によるローム層土が地表面に露出しているのに対し、南寄りは盛土による黒色土で、遺構が遺存していると予想された。そのため調査区南側寄りに、調査トレンチを2本のトレンチ(1・3T)を設定して、重機による表土剥ぎを開始した。しかし攪乱が著しく、遺構検出は困難のため、調査区中央寄りにもトレンチ2本設定(2・4T)し、計4箇所141㎡を試掘トレンチで調査を行った。

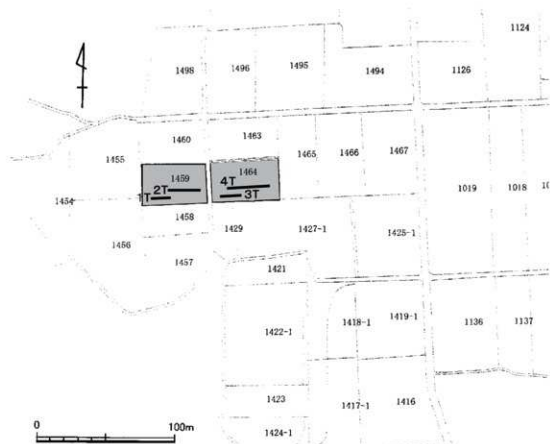
調査区全体で圃場整備や耕作時の攪乱が著しくみられ、遺構・遺物はまったく確認できなかった。表土にも混入していない状況のため、工事実施に問題なしと判断し、埋め戻して終了した。

参考文献

- 〔大分県大野町史〕昭和55年 大分県大野町史刊行会
 〔大野地区道路群発掘調査概報Ⅱ〕1994 大野町教育委員会



第10図 岩上遺跡調査位置図



第 11 図 岩上遺跡調査トレンチ配置図



岩上遺跡調査写真

IV 中野宮前遺跡

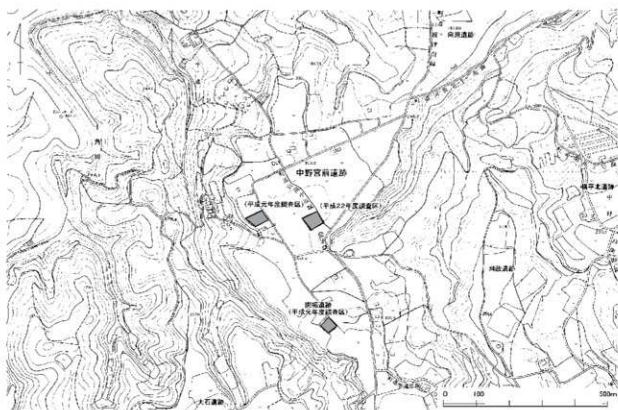
調査の概要

緒方町南部の台地上に所在し、平成元年度の調査で縄文時代早期の包含層や集石遺構が確認されている。平成 22 年度の調査区はその隣接地であり、同様の遺跡検出が予想されたため、調査トレンチを 2 本設定し、重機による表土剥ぎを行った。

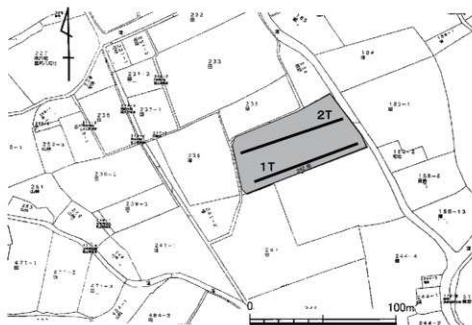
地表から 20~30cm でローム層が現れ、耕作時の攪乱がみられたが、遺構・遺物はまったく確認できなかった。以前の耕地整理により削平を受けているためか、遺物包含層が残っていない状況であることを確認した。そのため工事実施に問題なしと判断し、埋め戻して調査は終了した。

参考文献

「緒方地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ」 1990 緒方町教育委員会



第 12 図 中野宮前遺跡調査位置図



第 13 図 中野宮前遺跡調査トレンチ配置図



中野宮前遺跡調査写真

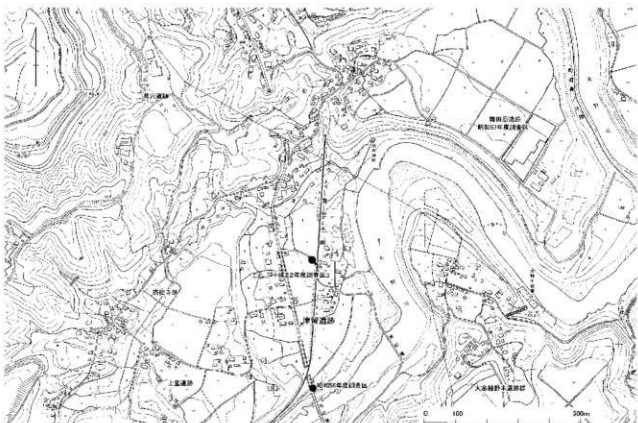
V 津留遺跡

調査の概要

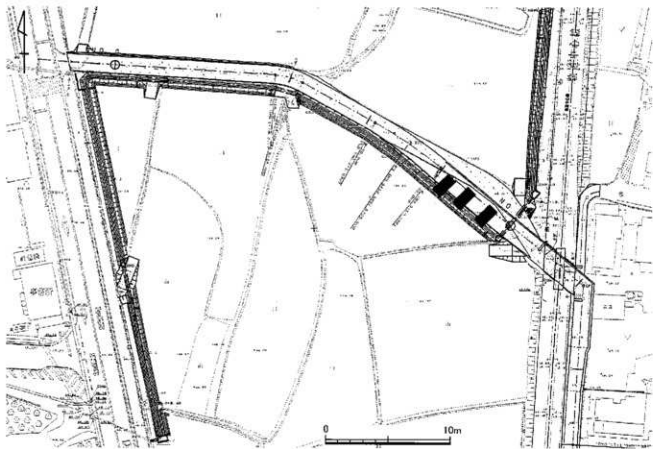
大剣町の大野川沿岸の段丘上に所在する。昭和 56 年の調査で旧石器時代を代表的する県下でも有数な遺跡が確認されたことで知られている。今回の調査区はそれより 400m 北側のほぼ平坦な水田であり、道路建設範囲に重機による表土剥ぎを行った。開発面積は道路幅 3m 程度の開発範囲であり、1m × 2m 程度のトレンチ 3箇所設定し、計 6m を掘り下げた。地表から 40cm 程度で黒色土が厚く堆積し、1m 程でローム層を検出したが遺構・遺物はまったく確認できなかった。表土にも混入していない状況のため、工事実施に問題なしと判断し、埋戻して調査は終了した。

参考文献

「津留遺跡発掘調査概報」1982 大分県教育委員会



第 14 図 津留遺跡調査位置図



第 15 図 津留遺跡調査トレンチ配置図



津留遺跡遠景写真

VI 湊平塚原石棺群

調査の概要

三重町東部の台地地形上に所在している。昭和24年頃に賀川光夫氏によって2基の箱形石棺が検出され、その後昭和47年度に大分県教育委員会による調査で箱形石棺1基と舟形石棺1基が検出されている。これまで4基の石棺が確認されているものの、古墳としての実態については不明な点が多い。賀川氏の報告では葺石として多数の円礫を有する小円墳群であったと推定されるが、その規模・形態までは把握できず、出土遺物も鉄製矛と斧があるのみで時期も5世紀後半頃と推定されている。その後圍場整備が実施されているが、周辺から古墳葺石と思われる礫が近年まで出土しており、周溝等の遺構の存在が予想されていた。地元住民の深耕予定により、試掘トレンチを4箇所の計186㎡を設定し、重機による表土剥ぎを行った。

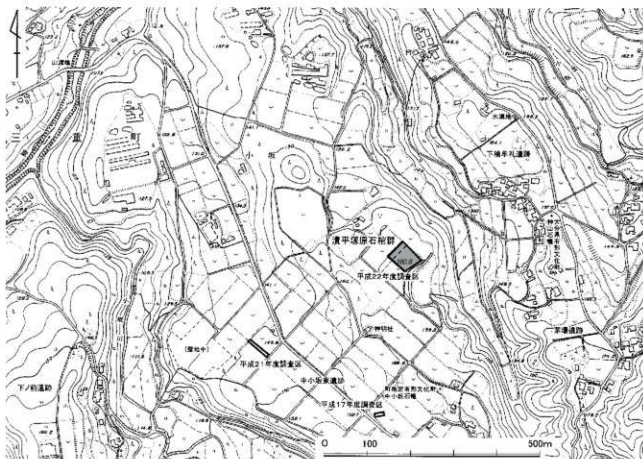
調査は地形的に高所である東寄りに、幅1.5m 延べ124mの長さのトレンチ4本を設定し、重機による表土剥ぎの後に人力で遺構検出作業を行った。地表から20cmでローム層より下層の地山層やマメコ層などを検出し、圍場整備や耕作時の攪乱が部分的にみられたが、遺構・遺物はまったく確認できなかった。葺石と思われる礫は攪乱層より出土すると考えられ、古墳の遺構は全く遺存しない状況のため、工事実施に問題なしと判断し、埋戻して調査は終了した。

なお賀川氏の調査では「塚原石棺」という遺跡名で報告されているが、大分県教委の調査では「湊平石棺群」として周知遺跡名となっている。地名は大字小坂字湊平であるが、通称「塚原」が地元では一般的な呼称であるため、湊平塚原石棺群という名称とした。

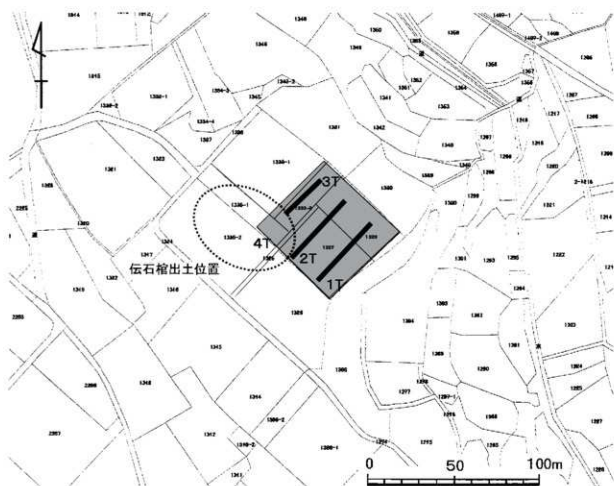
参考文献

「豊後国大野郡塚原箱式石棺に就いて」1949 賀川光夫

「三重町誌総集編」1987 三重町



第16図 湊平塚原石棺群調査位置図



第 17 図 浪平塚原石棺群調査トレンチ配置図



浪平石棺群調査写真

報 告 書 抄 録

フリガナ	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ
書名	豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書3
副書名	平成22年度調査
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	語 岡 郁
編集機関	豊後大野市教育委員会
所在地	〒879-7401 大分県豊後大野市千歳町新殿706番地1
発行年月日	平成24年3月29日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オホノキオツコ 小坂大塚古墳	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ 豊後大野市 三重町 小坂字大塚	44212	212046	32° 59'05"	131° 36'38"	2010.12.08 ～ 2011.01.18	25㎡	範囲確認
イワノシ 岩上遺跡	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ 豊後大野市 大野町 矢田字尾迫	44212	212574	32° 59'58"	131° 30'56"	2010.10.26 ～ 2010.10.27	141㎡	農業基盤 整備
ナカノミヤマエ 中野宮前遺跡	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ 豊後大野市 緒方町 中野字宮前	44212	212243	32° 54'56"	131° 24'26"	2010.10.28 ～ 2010.10.29	290㎡	農業基盤 整備
ツル 津留遺跡	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ 豊後大野市 大飼町 田原字津留	44212	212678	33° 03'38"	131° 38'15"	2010.12.04 ～ 2010.12.04	6㎡	農道建設
ツルノハラノイシ 潰平塚原石棺群	ブンゴオオノシナイイセキハクツツチヨウサガイヨウホウコクシヨ 豊後大野市 三重町 小坂字潰平	44212	212112	32° 59'17"	131° 37'34"	2011.01.20 ～ 2011.01.25	186㎡	農業基盤 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
オホノキオツコ 小坂大塚古墳	墳墓	古墳	前方後円墳(周溝・ 葺石)		
イワノシ 岩上遺跡	散布地				
ナカノミヤマエ 中野宮前遺跡	散布地				
ツル 津留遺跡	散布地				
ツルノハラノイシ 潰平塚原石棺群	墳墓				

豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書3 平成22年度調査

発行日 2012年3月29日発行

編集・発行 豊後大野市教育委員会

879-7401 豊後大野市千歳町新殿706-1

印刷 株式会社 双林社